

リチャード・フラナガン著／渡辺佐智江訳『奥のほそ道』(白水社, 2018)

内田康

✉ uchiday@mail.tku.edu.tw



遂に、と書いていいだろう。本年5月、2014年度のブッカー賞受賞作品であるリチャード・フラナガン *The Narrow Road to the Deep North* (Knopf Australia, 2013) の日本語版が刊行された。これに先立って既に出ている、中国語版の《行過地獄之路》(台湾・時報出版、2017年2月)や《深入北方的小路》(中国・人民文学出版社、同年7月)、韓国語版《먼 북으로 가는 좁은 길 (遠い北へ行く狭い道)》(문학동네、2018年1月)といった書名からでは伝わりにくいかもしれないが、本書の原題は湯浅信之による松尾芭蕉『おくのほそ道』初訳の英文タイトルに拠っている。夙に独訳(2015年)や仏訳(2016年)も出され、各国で好評を博してきた本書だが、やはり今回の日本語版の出版には特別な意義がある。それは一つには当作が、「大日本帝国」の所業の一つとして知られる「泰緬鉄道」の建設に際して動員した数多くの連合軍捕虜(およびアジア人労働者)の虐待事件を重要な背景としており、日本や日本人が当事者として登場してくるためである。「鉄道は日本人の精神であり、北の奥地へと続くわれらの細き道は、芭蕉の美と叡智をより広い世界へと届ける一助となるだろう」(渡辺版P.132)。かくて、20世紀のタイは17世紀日本の芭蕉と交差する。フラナガンは、この過酷な現場で捕虜として作業に従事させられた自らの父アーチーの実体験に拠りつつ、12年もの歳月を費やして脱稿、その晩に父は98歳で逝った。故に本作は、作家の父を指す捕虜番号「サンビャクサンジュウゴ(335)」一息子リチャードが幼い頃に覚えた日本語でもある一に捧げられている。

フラナガンの筆致は、奇しくも本作が世に出た同年公開の映画『レイルウェイ 運命の旅路 (The Railway Man)』の基となったエリック・ローマックスの自伝(1995年刊。日本語版は喜多迅鷹・喜多映介訳『泰緬鉄道 癒される時を求めて』角川書店、1996年)とは異なっているし、フィクションという点から言っても、同様の題材でピエール・ブールの小説を原作とした1957年の映画『戦場にかかる橋 (The Bridge on The River Kwai)』にも似ていない。作品の中心を占めるのは、タスマニア島出身で将校として捕虜たちの指揮を執る軍医ドリゴ・エヴァンスの動向である。彼の立場は、作家自身の父よりも、経歴からして、『戦争日記』(1986年刊。日本語版は河内賢隆・山口晃訳、而立書房、1997年)を遺したエドワード・“ウェアリー”・ダンロップ(1907-1993)を髣髴させる。物語はドリゴの77年におよぶ生涯を、その青年時代に当たる1940年代を軸に、行きつ戻りつしながら進行する。「大英帝国」の末端に属する彼とその部下らは、東のも

う一つの帝国の人間たちと、コレラやマラリアが猖獗を極めるタイのジャングルの中で駆け引きし合い、その間にも捕虜たちは一人また一人と命を落としていく。だが、本作は全篇が戦争の悲惨な写実に費やされているわけではない。少年時より詩を愛好し、戦場で部下を嗜める際にはキプリング「退場讚美歌」を、更に日本軍の命令で部下を強行軍に選抜する折にさえ、シェイクスピアの『ジョン王』『ヘンリー6世 第1部』の一節を吟くようなドリゴは、アルフレッド・テニスの「ユリシーズ」に人生を呪縛され続け、また叔父の後妻エイミーとの倫ならぬ関係をめぐる件り等も、ウェルギリウス『アエネーイス』の世界を思わせるなど、単なる描写を超えた重層的なイメージの波紋が、読む者の心を掻き立てる。

さて、作家のテキストを織り上げる上でのこうした周到な企みとも関わって、本翻訳が特異な意味を持つのは、作中における全5部の各表題や幾つかの場面で、芭蕉や小林一茶らの発句(haiku)が引用されているためでもある。これらの句は元来、小説の原文で英語訳によって、また他の翻訳版においても各々の言語に訳して掲げられていたものが、このたび日本語の「原典」に戻したかたちで引かれることになったわけで、例えばかつてSam Hamillの手で*The Spring of My Life and Selected Haiku* (Shambhala Publications, 1997)として英語圏へと越境した『おらが春』の世界等が、あたかも一茶自身の経歴さながら帰郷を果たしたかの如くである。実際、小説中に引かれた一茶の句は、五句全てがハミルの訳本に取められており、何句かの英訳文の一致から、フラナガンがこれを参照したのは確実だろう。また、作中で言及される「日本の辞世の句を訳した本」(同上P.35)は、Yoel Hoffmann編*Japanese Death Poems* (Tuttle, 1986)を指すと考えられるが、同書はドリゴが最終的に到達した境地—それはテニスではなく、二世細井之水が死に臨んで門人たちに円形を描いて示したという逸話(青木十口『誹諧家譜拾遺集』等)に見えるが、日本でもさほど知られてはいないかもしれない)のある種の悟りとして解釈したものと思しい—や、彼が戦地で対峙したナカムラ少佐による松本百花の辞世の句の提示等に、示唆を与えているのが明らかである。こうした絡み合う引用の交響が、日豪両国の登場人物たちの辿った凄惨な戦中と、それに続く戦後の人生行路とを巧みに際立たせ、やがて全てが時の流れの中に呑み込まれていく。鉄道は空しく破壊され「帝国の夢と死者の跡には、丈高い草が茂るばかりだった」(同上P.309)。…「兵どもが夢の跡」である。

ドリゴも日本人将校たちも、自らの言葉で詩を口ずさむ。だが彼らが相手の詩の世界へと入り込んでいくことはない。「お母さん、彼らは詩を書くのです」。本書のエピグラフ、パウル・ツェラン「狼マメ(Wolfsbohne)」の一行が、両者の断絶を鮮やかに照らし出す。或いは、ドリゴの末期の眼に映った之水の円のよう、言語を超越したものでしか困難な跨境はなし得ないのだろうか？この翻訳版の刊行は、かつての帝国の末裔たちに、そうした問いをも投げかけているかのように思われる。

内田康 Yasushi UCHIDA

(台湾) 淡江大学日本語文学系副教授。日本中世文学、日本現代文学、東アジアの比較文学。『村上春樹論—神話と物語の構造』(台北：瑞蘭國際, 2016)、「村上春樹文学と「阿闍世コンプレックス」—「海辺のカフカ」を例として—」(『台湾日本語文学報 42』台湾日本語文学会, 2017)など。